

龔廷賢方の清代医学文献における引用

—日中医学の相違—

星野 卓之, 天野 陽介, 小曾戸 洋, 花輪 壽彦

北里大学東洋医学総合研究所

【目的】 日本では『万病回春』などの龔廷賢による医書が広く受け入れられ、そこに所載されていた方剤は現代の処方集にも多く取り上げられているため、今なお日本漢方に大きな影響を及ぼしているといえる。日本漢方と中医学の差異を論じるうえで、龔廷賢による方剤をどれだけ応用しているかに注目することは重要と考えられる。清代において龔廷賢の引用が少なくなったことは知られるが、処方ごとの解析はされていない。今回、我々は清代医学文献における龔廷賢方の引用状況について調査した。

【方法】 調査対象は、日本で医療用エキス製剤として用意される処方のうち、龔廷賢による医書が原典と確認されるもの（芎帰調血飲、滋陰至宝湯、清上防風湯、疎経活血湯、竹茹温胆湯、二朮湯、潤腸湯）とした。清代の中国文献を可及的に電子テキスト検索し、その引用状況を調査した。

【結果】 芎帰調血飲は龔廷賢の父、龔信の創方で、『濟世神驗良方』（1679年）女科門に引用される。滋陰至宝湯は明代の龔居中『紅爐点雪』（1630年）巻2痰火骨蒸に引用があるのみで清代文献には認められなかった。清上防風湯は、張潔『仁術便覧』（1585年刊）巻一耳病の清上防風散条にある加味方に一致することから、従来からあった清上防風散加味に龔廷賢が新たに命名したものと考えられ、清代では清上防風湯のみが『沈氏尊生書』（1773年）巻22面部と『驗方新編』（1846年）巻17面部で取り上げられている。丹溪学派によって作り上げられてきた四物湯の加味方に新たに命名し独立させた処方に疎経活血湯と竹茹温胆湯がある。『万病回春』の疎経活血湯は、『古今医鑑』に疎筋活血湯として初出するが、どちらの処方名も検索されなかった。竹茹温胆湯も明代の『孫文垣医案』に見られるのみで引用はない。温清飲は別名解毒四物湯として『丹溪心法附餘』（1536年序刊）に八味等量の処方として初出するため今回の検討から外れるが、解毒四物湯としてもその引用は乾隆年間の4書に限られ、温清飲もしくは温清散の名称では『女科切要』と『婦科玉尺』に取り上げられるのみで、他の処方と同様に様々な疾患への活用は進んでいない。丹溪学派の二陳湯加味方から作られた二朮湯も引用がない。潤腸湯も東垣・丹溪方のほか多数の同名異方があるが、龔廷賢方の引用はない。結果として調査した7方のうち5方は引用がなく、のこり2方の引用状況も龔廷賢の適応を踏襲するものがわずかに3書あるのみで、一連の医書群に影響を及ぼしたという様子は窺えなかった。

【考察】 龔廷賢により命名された方剤の多くは丹溪学派の四物湯や二陳湯加味方が基本となっており、類方も多くその後の引用状況を調査するのは困難である。しかし調べた範囲ではごく限られた引用にとどまり、清代の医学に及ぼした影響は日本に比べ非常に小さいと言わざるを得ない。新たな感染症の蔓延があったとしても両国における疾病構造の変遷は同時代として大差ないと仮定すれば、明から清への政治体制の変化が明代医学の衰退に影響した可能性が高い。今回調査した処方、日本で保険医療用処方として容易に用いることができるものであるが、その応用を考えるうえでは、江戸期以降の日本文献を中心に調査し、さらに現代臨床からの報告を参照することが望ましい。

【結論】 江戸期以降の日本で頻用されている龔廷賢方は清代医学文献での記載がごく少なく、その活用の違いが日本漢方と中医学との差異を生む一因となった。